

国文研ニュース

No.38
WINTER 2015



鎌倉八幡前旅館「三ツ橋」正月用広告

目次

●メッセージ		
「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」の最終目標	長島 弘明	1
●研究ノート		
特定研究「日本の近世における中国漢詩文の受容 —三体詩・古文真宝を中心に—」	神作 研一	2
坂田穩好氏寄贈・寄託万葉集切	田中 大士	4
語り物末流の研究:プリンストン本『さがみ川』とパリ本『しづかあづまくだり』を巡って	パトリック・シュウエマー	6
●トピックス		
第38回国際日本文学研究集会	陳 捷	8
The 14th International Conference of EAJS (European Association for Japanese Studies) in Ljubljana, Slovenia, 2014	海野 圭介	9
平成26年度 国文学研究資料館「古典の日」講演会	田中 大士	10
特別展示「中原中也と日本の詩」	企画広報係	11
連続講座「くずし字で読む『源氏物語』」	野網摩利子	11
海を渡った豊後キリシタン史料 —マレガ・プロジェクトの概要—	大友 一雄	12
シンポジウム「多摩地域の博物館・資料館・美術館における防災と地域連携」によせて	太田 尚宏	13
古典籍共同研究事業センターについて	山本 和明	14

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」の最終目標

長島 弘明（東京大学教授）

国文学研究資料館が実施主体となる「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」のプロジェクトが、文部科学省の大規模学術フロンティア促進事業の一つとして平成26年度に正式に採択された（期間10年）。平成24年度から創設された同事業としては、この資料館のプロジェクトが人文・社会科学の分野で初めての採択となるという。この計画の出発点となった、日本学術会議の「学術の大型施設計画・大規模研究計画」のプロジェクト立案者として、また人文学の一研究者として慶賀に堪えない。人文学の研究は所詮一人でやるもので、大型予算とは無縁だなどという偏見もなくなることであろう。

このプロジェクトの根幹には、「日本語の歴史的典籍」（明治以前に日本語で書かれた全ての書籍）のデータベース化がある。まずは各書籍の画像データベース化と、それに付帯する書誌情報のデータベース化を行う計画という。実は、昨年平成25年度の大規模学術フロンティア事業入りを目指していた段階のプロジェクトの内容はここまでであり、名称も「日本語の歴史的典籍のデータベースの構築計画」であったが、その後一年の間に、国文学研究資料館と文部科学省のやり取りの中で、「国際共同研究ネットワーク構築」が加わったという。構築したデータベースの利用によってどういう新しい研究が可能となるか、また研究の国際化・共同化がどう進むか、なるほど大事なことである。国境を越えた研究、学融合による新しい研究領域の創成への期待がふくらむ。

ただその一方で、この10年の期間内にデータベース構築による研究成果を出すことが第一の目的だと、過剰な成果主義に陥ることが心配である。それはこのプロジェクトの将来にもかかわってくる。あえて強い言い方をすると、このプロジェクトの最終目標は、画像データベースの構築でも、それをういた国際共同研究でもない。目標とすべきは、このプロジェクトの始発である日本学術会議の計画書にも書かれている通りだが、画像データベース化の先にある古典籍のフルテキスト化であり、テキストデータベースの構築である。画像データベースは、江戸文学研究が専門の私には涙が出るほどありがたい。江戸文学で活字になっているものは一割にも満たず、研究には原本を読むしかないからである。しかし、崩し字で書かれた原本が読めて、画像データベースの恩恵にあずかることのできる人間が果たして何人いるだろう。また、崩し字が読みこなせる人

にとっても、語句の検索一つできない画像データベースの構築だけにとどまるならば、その価値は激減する。

テキストデータベースの構築は、万人に日本語の歴史的典籍を開放する。言い換えれば、日本人のみならず日本語を扱える外国人を含めたすべての日本語習得者に、過去の歴史における日本人の精神活動の全てを知る機会を与える。日本文学や日本語学だけではなく、歴史、美術、思想・宗教、法律、経済、医学、科学技術等々の諸分野に至る、日本文化の全分野に対する巨大な総合索引を、だれでも簡単に手に入れることができるようになるのである。諸外国が長い年月をかけ国家的事業として編集した大規模辞書を、日本も持つことができる可能性が遅まきながら初めて出てくるのである。テキストデータベースの構築は、最重要のインフラ整備である。それは学術のインフラ整備にとどまらない。日本文化全体のインフラ整備であり、日本文化全体の底上げに資するのがこのプロジェクトである。日本文化の国際的発信とよく言われるが、これ以上の日本文化の国際発信が他にあり得るだろうか。

一口にテキスト化といっても、翻刻の際の漢文のとり扱い、清濁やふりがな（ルビ）の処理、漢字のJISコード・Unicodeの問題など、懸案が山積している。画像通りの翻字も必要だが、それでは例えば『源氏物語』の古写本などは、ひらがなだらけ、しかも歴史的仮名遣いとはちがった表記で、研究者でもほとんど読めなくなってしまうだろう。こういうものには少なくとも2種類の翻字原稿が必要である。さらに言えば、検索に適した（または適さない）翻字の形式というものもある。今のプロジェクトの次に、引き続いて直ちにテキストデータ化にとりかかれるよう、そういった点につき速やかに（今日からでも）検討を始めていただきたい。また、古典文学の全集類をはじめとして、現在すでに活字本として出版されている作品については、出版社や校訂者との権利の調整も必要だろう。

テキストデータベース化への周到な準備は、画像データベースによる共同研究ネットワーク作りと同様大切である。否、むしろそれより大切だと（テキストデータベースの方が研究ネットワーク形成を強力に促す）、文科省や財務省に、そして何よりも国民に、国文学研究資料館は何度でも懇切に説明して頂きたい。テキストデータベース化の後には、さらに現代語訳、英語をはじめとする諸外国語への翻訳、…という道筋が遙かに続いている。

特定研究「日本の近世における中国漢詩文の受容—三体詩・古文真宝を中心に—」

(研究期間：平成 26 年度～平成 28 年度)

^{かんさく}
神作 研一 (国文学研究資料館教授)

『三体詩』は宋の周弼編、南宋淳祐10年(1250)の成立。『古文真宝』は元の黄堅編、元至正26年(1366)の成立か。ともに集部・総集類に分類される、中国詩文の撰集として名高いもの。

例えば、『おくのほそ道』の冒頭「月日は百代の過客にして…」が、『古文真宝後集』の李白「春夜桃李園に宴するの序」を踏まえていることは周知の事実だが、それが江戸時代に刊行された多種大量の『古文真宝』の、どの版に拠ったものであったのかは必ずしも明確ではない。また、文学史では、服部南郭が江戸中期に『唐詩選』を称揚して以来『古文真宝』『三体詩』は急速に廃れていったと説かれるが、果たして本当にそう確言できるのか。いま大量の『古文真宝』『三体詩』に就けば、幕末明治に至るまで、その刊行が一貫して行われていた事実を確認することができる。そもそも『古文真宝』『三体詩』は、江戸時代にいったいどのくらい刊行されたのか、版種はどのくらいあるのか——。西鶴が「古文真宝なる顔つき」(『諸艶大鑑』)と書き、素堂が「古文真宝気つまる秋」(『江戸両吟集』)と付けた、そうした江戸人の基礎教養としての『古文真宝』『三体詩』の、刊行状況や版種を明らかにしたい。これらは、ありふれた言わばどこにでもある書物だが、そうであればこそ多くの人びとに読まれ、思考の形成に大いに与ったのである。ありふれているがゆえに尊いと見るべきだ。

本特定研究では、中世に伝来・盛行し、特に江戸時代の文芸に絶大な影響を与え続けた『古文真宝』と『三体詩』について、主に林望氏の旧蔵書(前者480点・後者120点)を書誌学的に検討し、刊・印・修を識別した「目録」(冊子体)を編刊することを目的とする。以て、江戸時代における中国漢詩文受容の解明に、地味だけれどもひとすじの堅固なる基盤を提供したいと考える。

研究組織は次の通り。

研究代表者

高橋 智 (慶應義塾大学附属研究所斯道文庫・教授)

研究分担者

青山 英正 (明星大学人文学部・准教授)

伊藤 善隆 (湘北短期大学・准教授)

合山林太郎 (大阪大学コミュニケーションデザインセンター・専任講師)

染谷 智幸 (茨城キリスト教大学文学部・教授)

中川 豊 (中京大学文学部・准教授)

林 望 (作家・書誌学者)

福井 辰彦 (上智大学文学部・准教授)

金田 房子 (国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター・准教授)

陳 捷 (同 研究部・教授)

神作 研一 (同 研究部・教授) *館内連絡者



高橋智 代表

林望氏

筆者

「リンボウ先生の書誌学講座」の様子



詳説古文真宝大全(後集)
*朝鮮本 特大1冊(存巻2・3)

次に、本年度の研究会開催日程を示す。

*このほかに、コアメンバーによるワーキングを4回開いた(5月14日・23日・7月4日・10日)。

- 第1回 5月30日(金)
- 第2回 6月27日(金)
- 第3回 7月30日(水) 31(木) 8月1日(金)
- 第4回 10月17日(金)
- 第5回 11月21日(金)
- 第6回 12月19日(金)
- 第7回 2015年1月23日(金)

時間はいずれも10時30分から17時まで。毎回、13時30分から15時までは「リンボウ先生の書誌学講座」を開講、この時間に限り、館内からも多くの司書たちが参加しているほか、首都圏の大学院生や若手研究者も大勢聴講に来ており、毎回皆でにぎやかに、しかも和気藹々とした中で、書誌学のイロハを学んでいる。

研究会の時間の大半は書誌調査に費やされ、今年度は『古文真宝』の書誌調査を開始、継続しているところだが、480点という大量の現物を前にして、書誌データの記述方法や刊・印・修の識別などを具体的に考えることができるのは、書誌的研究の実践と経験の上で、これ以上ない幸運と言わねばならない。私たちのゴールは、「目録」といういささか味気ないものかもしれないが、そこに辿り着くまでの過程こそ、最も大切なものなのだと痛感する。

書誌カードの著録は、刊・印・修のノウハウを獲得する

ためにあえて国文研の「細目調査カード(Cカード)」を使わずに、書誌学者阿部隆一氏の確立された方法に拠っている。【参照】高橋智『書誌学のすすめ 中国の愛書文化に学ぶ』(東方書店、2010)、林望『書誌学の回廊』(日本経済新聞社、1995)。*のち『リンボウ先生の書物探偵帖』と改題、講談社文庫、2000)ほか。

まっさらなレポート用紙に、①から⑨までの番号を振って自ら書誌事項を記入していくこのスタイルは、その要領を掴む(体得する)まで、なかなかはかが行かないのだが、それがためにかえって、折々に立ち止まって沈思し、議論し、あるいは原本を「くらべて考える」。【参照】安野光雅『くらべてかんがえる』(福音館書店、1972)。

そうして少しずつ解決する事柄も多く、参加するメンバー一人ひとりにとっても、こうした試行錯誤の時間そのものが得難い貴重なひとときになっていると思量される。

たくさんの方々の御厚情と、当館の酒井量基学術情報課長ならびに図書情報係の和田洋一係長、古川麻実子・秋山嘉奈子・高橋さおり三氏のひとかたならぬ助力の甲斐もあって、作業は確実に進捗している。本誌にも、今後数回にわたってリレー形式で「研究余滴」を載せていきたい。

なお、2015年度以降も、研究会は年に6回程度開催する予定である(日時は未確定ながら金曜FIX)。次年度は、毎回14時から15時30分まで、今度は研究代表者である高橋智先生による「中国書誌学講座」を開催するので、関心のある向きはぜひ覗いていただきたい。



古文真宝コレクション(林望 旧蔵) *一部



古文真宝諸本考異
(元禄11年刊・大1冊)

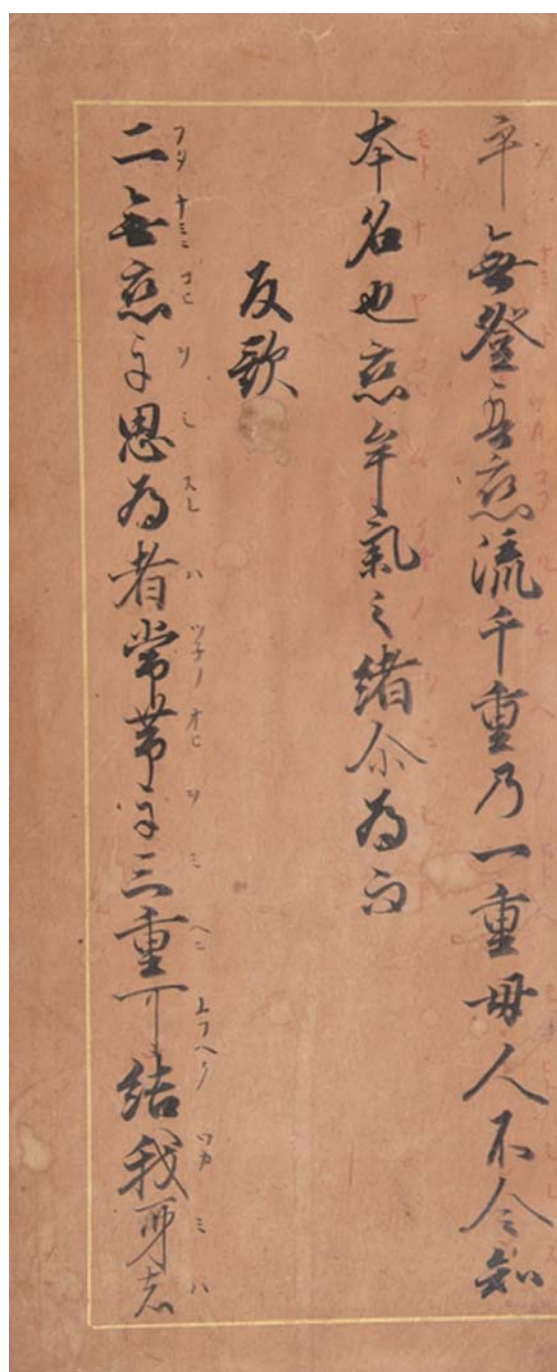
坂田穩好氏寄贈・寄託万葉集切

田中 大士 (国文学研究資料館教授)

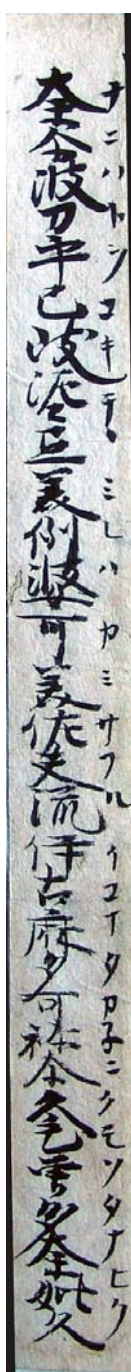
坂田穩好氏は、兵庫県加古川市在住の古筆収集家である。当館には、数多くの貴重な所蔵古筆切を寄贈、寄託いただいている。その一端は、当館刊の『古筆のたのしみ』からもうかがうことが出来る。今回は、その中でも『万葉集』に関わる切の紹介を行う。坂田氏から当館に寄贈、寄託いただいている『万葉集』の古筆切は、三種。A 天治本万葉

集切、B 春日本万葉集切、C 金沢文庫本万葉集切である。

『万葉集』は奈良時代末期に編纂された和歌集であるが、当時は、平仮名、片仮名が発明される前であった。そのため、『万葉集』の歌は、漢字を仮名の代わりにして表記されている (いわゆる「万葉仮名」などと呼ばれている)。後の時代では、まず、それらの歌を解説しなければならなかつ

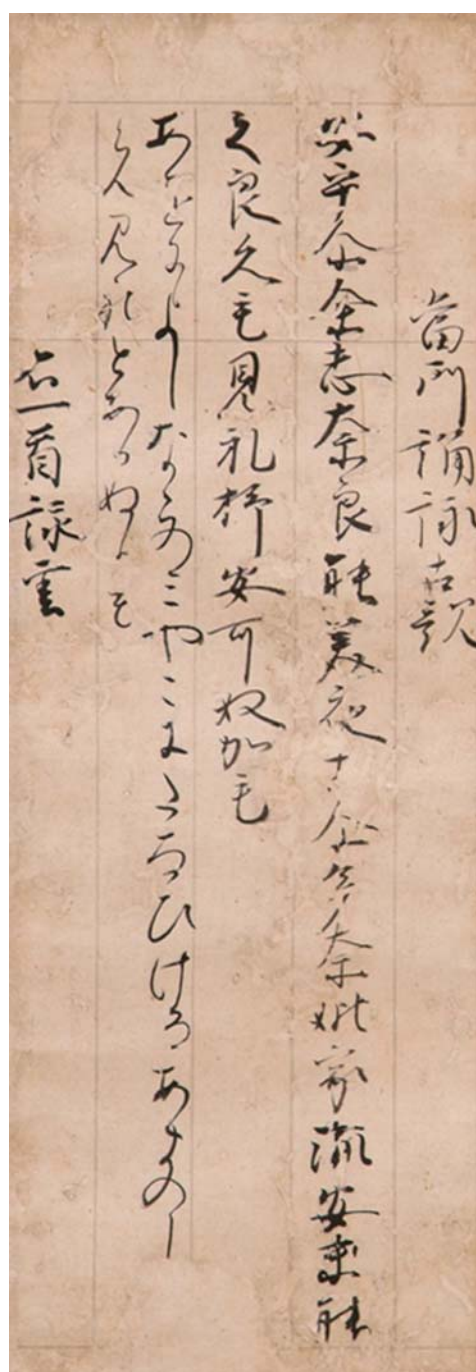


A 天治本万葉集切 (平仮名訓)



B 春日本万葉集切 (片仮名訓)

C 金沢文庫本万葉集切 (仙覚校訂本)



た。万葉仮名を読んだものが、いわゆる訓である。この訓の付け方によって、万葉集の伝本の時代がおおむねわかる。

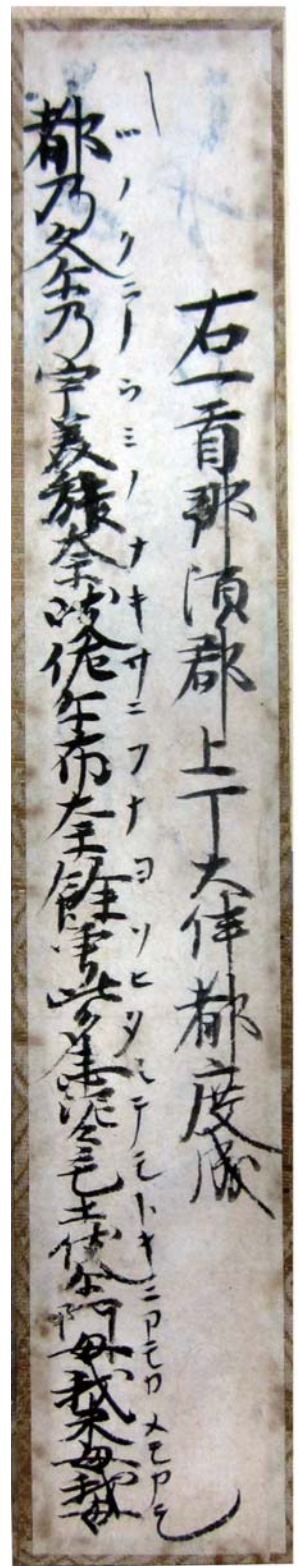
平安時代は、歌本文(万葉仮名)を書き、そのあとに平仮名で訓を書いた。そして、鎌倉時代になると訓を歌本文の横に片仮名で書くようになる。鎌倉時代になっても、『万葉集』には、4500首中150首あまりの読めない歌が残っていた。それらすべての歌に訓をつけたのが仙覚である。仙覚は、13世紀中頃、『万葉集』の様々な伝本の本文を見比べながら、決定版と言うべき校訂本を作り上げた。これが、仙覚校訂本である。現在使われている『万葉集』のテキストは、この仙覚校訂本を基にしている。以上が、平安時代から鎌倉時代にかけての『万葉集』の伝来の歴史であるが、坂田氏の万葉集切三種は、この流れをよく反映している。

まず、Aの天治本は、平安時代天治年間(1120年頃)書写の本である。訓は、歌本文(▽)の左に平仮名で付されている(▼)。Bは、春日本。鎌倉時代の寛元元年から2年(1243~4)にかけて写された本である。訓は、歌本文に右側に片仮名で付されている。この二本は仙覚校訂本以前の伝本である。一方、Cは、金沢文庫本、仙覚の校訂本の一つである。仙覚は、春日本のような、歌本文の右傍らに片仮名で訓を付す形に習って、校訂本を作っている。前二行が長歌、第四行がその反歌である。長歌の訓は朱で付されている。これは、先ほど触れた仙覚が新たに訓を付した歌の印である。これを仙覚は自ら「新点」と称している。このように、坂田氏の万葉切を一覧するだけで、平安時代から鎌倉時代にかけての『万葉集』の伝本の変遷がたいへんよく把握できる。また、これらの切には伝本ごとの特徴もよく現れている。Aの天治本は、墨で縦横の線(界線・罫線)が引かれている。また、Cの金沢文庫本は、周囲を金泥の線が囲っている。一方、Bの春日本は、この写真では見えないが、墨ではなく、ヘラで押した罫線、界線が存する。一般にこれは空罫、空界と称される。

ちなみに、Aは、巻15の3602番、Bは、巻20の4380番、Cは、巻13の3272の後半から3273までの部分である。

ところで、先日、当館の青木睦准教授から、氏が調査を行っている松江の旧家から手鑑(古筆を集めたアルバムのようなもの)が見つかり、そこに春日本が貼られていたという知らせをいただいた。それは、右の通り。巻20の下野

国の防人の歌(4382の左注と4383の歌)である。先の坂田氏の春日本切も同じ下野国の防人歌であり、歌の位置はきわめて近い。春日本は、和歌懐紙(春日懐紙)の裏に写されているのだが、当面の二枚の切はまさに同じ懐紙裏に写されていたと考えられる。春日懐紙は、現在約160枚が知られているが、裏の春日本が残っている事例はきわめて少なく、まして同じ懐紙裏の春日本の断簡が別々に見出される事例は希有といってよい。これらの裏の春日懐紙の所在も知られており(憲清「山家残暑」題。根津美術館蔵)、春日懐紙、春日本がどのように書誌的な変転を経てきたかを知る上ではたいへん重要な資料と考えられる。そのような貴重な断簡が、一枚は当館に寄託され、もう一枚当館の教員によって見出されたということは、偶然とは言え、因縁を感じざるを得ない。当館は、春日本の裏の春日懐紙のコレクションとしては最大の規模を誇っている(31枚)。この奇縁を生かして、まだ多くの謎を残す春日懐紙の解明を一步でも前進させたい。



春日本万葉集切 『古筆鑑』の一部・三谷権大夫家文書…(島根県松江市歴史館寄託)

語り物末流の研究：プリンストン本『さがみ川』とパリ本『しづかあづまくだり』を巡って

パトリック ショウエマー
Patrick SCHWEMMER

二年前、私はプリンストン大学 Firestone 図書館において、蔵書のほとんどがアラビア文献である Robert Garrett コレクションの中で『さがみ川』と題される日本の絵巻三巻を見出した¹⁾。また、翌年の夏、同じ物語を浄瑠璃正本にした版本『梶原最期しづかあづまくだり』をフランス国立図書館で撮影して、これまで最初の完全な翻刻を作ることができた。これらの作品を中心に、去年9月より小林健二教授のもとで国文研において一年間研究を進めて、10月15日「国文研フォーラム」でその結果を発表した。本稿はその内容を纏めたものである。

まず、プリンストン本『さがみ川』の筆者を特定することによって、寛文延宝頃上方で制作されたことが明らかになった。このことを念頭に置いて、『相模川』という物語をこれほど豪華な絵巻に作り上げることやそれを注文すること、そしてプリンストン本にしかない詞章の特徴の意味を考察した。結論から先に言うと、珍しくも頼朝のいわば「戦争責任」を問うところで、もとから反体制的に読まれかねない『相模川』を、頼朝という典型的な将軍に対して批判的な詞章に変えるプリンストン本が、江戸の新体制に対する不安感と帰属意欲、つまり嫁入り本として本作品を注文したような初期近世大名家の気持ちを表している可能性を指摘したい²⁾。次に、すでに幸若舞のベストヒットを総括して見せ物的に浄瑠璃へと展開している過渡期作品である『相模川』を下敷きに、同時期に台頭しつつあった町人階級の好みに合わせて浄瑠璃に脚色した『しづかあづ

まくだり』を取り上げる。登場人物の多くを女性に変えるだけでなく、物語の展開も女性が原動力となること、江戸初期に新しく可能となった観光という文化を誉め讃える道行が長らく入れられていること、そして『相模川』では形成中に見えるブルジョア的な判官鼻屑、あるいは悲劇性が一層強く感受されることが特徴的として指摘される。一方、残さなくてもいい『相模川』の常套句をも残していることで親戚関係が明らかである。一年の研究の成果として、中世から近世への過渡期において語り物文芸が政治・社会的変化に伴い、媒体・ジャンル・趣向を変えて生き延びた一二相を垣間見ることができた。

まずプリンストン本『さがみ川』だが、小林教授は詞書の筆跡を一見されたところ、朝倉重賢筆と鑑定された。寛文延宝頃上方で活躍した重賢関係作品の詳細を論じられている石川透先生も同意見である³⁾。さて、金泥、金箔、緑青をたくさん尽くして、『相模川』をこれほど豪華な絵巻に作るこの意味が気になる。注文したのはしかるべき大家だと思定され、筆者は階級がわからないが、上方の町人と推測される。絵草紙の注文・作成に関する歴史資料は乏しいので⁴⁾、特徴が注文者か制作者か、誰の意思を表しているかは議論の余地が残る。

ただし、プリンストン本の詞章を諸本と比較したところ、その独自箇所にはっきりとした意味が読み取れるのは確かである。まず書き出しに「ちせう四年八月十七日にむほんをおこして」という日付と「謀叛」という言葉が添

えられている。プリンストン本に初めて現れる下線部分は、歴史性を添えると同時に、計画的で平和な政権交代でもなかったということを強調している。次に『靡き常盤』の箇所では、常盤はプリンストン本でのみ「まさしくをつのかたきにしたかはんこのこゝろさよよしゆにもみつにもならはなれなひくましと思ひきられさふらへとも」と、受動的な存在に変わっている。義経を含めて若三人を助けるために、平治の乱で夫義朝を殺した清盛の家に入る常盤はここでのみ、道徳的なこだわりで抵抗するようになっている。このプリンストン本の読みと、中立的な詞章になっている天理本系統に対して、寛永初期写で同じく独自の詞章を有する慶應本では、この行為を逆に常盤の「知略」として、事実その成功により失脚すべき清盛が「不審に思う」こととして位置づけされていた。女性が性を利用してでも便宜を図る世の中から、女性の貞操を不安がる階級へという転換においては、一種の資本主義社会において、ブルジョア身体を清めることによって血統・相続を確保しようとする心理が垣間見られる。なお、和泉ヶ城の箇所も同趣味に考えられる。つまり、忠衡の父の遺言への忠実を巡る論争が大いに拡大されている。こうして親孝行の場面をさらに脚色する行為に、財産の相続が重要になる階級の趣味を読み解くこともできる。しかし、プリンストン本が制作された意味合いを追究するに当たってもっとも留意したいのは、『相模川』諸本においてもとから厳しい義経と義経郎等の亡霊の頼朝批判がさらに強め

1) 本作品の完全なデジタル版は同図書館のウェブサイトでご覧できる：

<https://blogs.princeton.edu/manuscripts/2014/09/22/japanese-scrolls-digitized/>

2) プリンストン本『さがみ川』の詳細にわたる社会・政治的位置づけは、筆者の博士論文『Samurai, Jesuits, Puppets and Bards: The End(s) of the Kōwaka Ballad』(プリンストン大学2015年)を参照されたい。

3) 石川透「朝倉重賢関係の奈良絵本・絵巻」『奈良絵本・絵巻の生成』(2003年)

4) 石川透、同稿。

られているということである。義経が「これもひとつのつみとなりて候」こうして将軍に「罪」を帰する詞章はプリンスの外にも天理本系統にも見られ、慶應本だけに欠けているが、次から現れる弁慶の亡魂が「かちはらに同心しけるよりともか心のうちこそをろかなれ」と批判する。諸本では「言い甲斐なき者の讒言を用ひ給ふ頼朝の御心の内こそ無念なれ」などとあるのに対して、プリンス本では「愚か」となっており、次の世代では歴代の将軍に言及することだけで本が禁書目録に入るようになると思えば⁵⁾、プリンス本に恐るべき語弊があるということになる。さて頼朝の「罪」も「愚か」も明かされたが、悪い臣下の糾弾と善い臣下の昇進で何とか埋め合わせとなり、「君子ふしのみちた、しくしてかまくら殿の御世はすゑはんしやうとこそ聞えけれ」などと終わるので、佐伯真氏はこの祝言的な結論を真に受けて『相模川』を頼朝を極めて美化する物語として解釈されるが⁶⁾、梶原の讒言を信じることによって犯した頼朝の「罪」が結局贖罪されるといっても、罪があったと言いつつその大きさは過小評価されている気もする。もっとも、天理本系統でもプリンス本でもこの「讒人これを追わう」ようにという「王者」への戒めが省かれている。ただし、特に以上のような言葉遣いでは人間の善悪が判定できない、悪の権力者とそれに苦しんで「さんざん泣く」メロドラマ的な英雄を措定することによって、プリンス本は義経物語の新展開をなしている。さらに、豪華に作らせた大名家においてか作成した絵草子屋の上方町人階級においてか、17世紀江戸体制の形成に伴う不安感が垣間見できると考える。

それに対してバリ蔵『しづかあづまくだり』では、同じような趣味が、今

度は例えば歴博甲本『洛中洛外図屏風』に見るような浄瑠璃の庇護者達、つまり町人絵師に絵巻を頼んだ大名ではなく、多くは女性である町人階級の消費者の趣味に合わせて同じ物語が様々な変化・展開を遂げている。まず、頼朝の罪を糾弾するのは義経の亡霊ではなく、義経の思い人静とその母である。なお、二人は浄瑠璃ならではの浄土宗の尼になって、この正本が上方二條通り喜右衛門の制作であるのに合わせて、徳川幕府の成立に伴う治安の向上で初めて可能となった消費文化としての観光を楽しむ道行が京都から鎌倉まで繰り上げられる。一方、『相模川』では「大しやう殿その日の御しやうそくにはとくさいの御かりきぬ風にたをめるたてゑほしあしけの御馬にしろくらをかせ御身ゆうにそめされける御むまそへには…」などと長く武装に文面を費やしてから、移動の方は単純に「されはほとんどさかみ川につきたまひけり」としかない。口頭文学固有の表現として、『相模川』では幸若らしく「そもそも」や「さるほどに」が使われるのに比べて、『しづかあづまくだり』はまず綺麗に五段に分けられており、一段一段が一貫として「扱も其後」で始まり、「中々申はかりはなかりけり」で終わるので浄瑠璃の常套句が整っている。

私の研究のもう一相と関連する語誌として、静が義経の墓の前で歌念仏をして魂呼びする場面において、「あたりほとりもは、からす。こゑを上てそなき給ふ」という箇所もある。このような語り物的な言い回しは16・17世紀日本にいたイエズス会の宣教師が日本語によって作った物語文学に大きな影響を及ぼした。例えばバチカン文庫蔵のパレット写本に見られる『受難道具問答』で聖母マリアが十字架にかかったイエスに「mizzucara cono

von cotouo qiqu yori cocoro vodorogi midarete, arumo arareneba fitomeuo sarani fabacarazu, banmin no nacauo vaque xinoguite, core made core made mayritaru vo goranji tamo ca?」と呼ばれるのと酷似しているので、このような語り物によるキリシタン文学への影響もあったと考える。と同時に弱者を美化するキリスト教と似てくる傾向も見られる。『相模川』でさんざん泣きながら私憤を漏らす義経の亡霊が「まてたせいにふせいかなはねはよしつねまいるなり」と（キリスト教の用語だが）秘跡的な臨在を約束することに引き続き、『しづかあづまくだり』では義経の亡霊が「大せいてきを打取か。よせては大きくんあててをかへみかたはふせい。入かはるせいもなく皆々打死す」と勝ち目もない悪の覇者に圧倒されるという辛い気持ちを美化する趣向が顕著である。以上、『しづかあづまくだり』が物語の主要人物の女性に変えていると述べたが、それだけではなく、物語を展開させる原動力も女性に移っているということも指摘したい。最初の方に東国へ下ろうと志したのが静であるだけではなく、静を頼朝の前に呼び出して頼朝の回心の契機を作るのも頼朝の御台北条政子なのである。しかし、その回心の際に使われる「差し当たる道理につめられて」という言い回しや、ほぼそっくりのまま残っている梶原最期の場面など、『相模川』という原作の容貌を残す箇所も見られる。

以上、本年国文研で研究できた二つの作品で、17世紀の過渡期にわたって語り物文芸が経た媒体、階級、政治的位相における変動を垣間見ることができた。以上の愚見は筆者によるものだが、展開させる契機をいただいた小林健二教授に深い感謝の念を表したい。

5) Peter Kornicki, "Manuscript, Not Print: Scribal Culture in the Edo Period," *Journal of Japanese Studies* Vol. 32 No. 1 (2006).

6) 佐伯真一「源頼朝と軍記・説話・物語」『平家物語遡源』(1996年)

第38回国際日本文学研究集会

平成26年11月29日(土)～11月30日(日)、第38回国際日本文学研究集会が国文学研究資料館において開催されました。二日間に渡る研究集会において、国内外の応募より選出された11名の研究発表、4名のショートセッション発表、6名のポスターセッション発表の、計21名による発表がなされました。また、二日目の午後には、「図像のなかの日本文学」と題するシンポジウムが行われ、板坂則子氏(専修大学教授)の司会で、ガーストル・アンドリュウ氏(Gerstle Andrew・SOAS ロンドン大学教授)・楊曉捷氏(カルガリー大学教授)および土佐尚子氏(京都大学教授)の3人のパネラーに日本文学と図像との関係をめぐってのさまざまな問題を大いに語って頂きました。

国際日本文学研究集会は、国文学研究資料館の主催によるもので、日本文学研究の国際的な発展を目的とし、昭和52年から毎年秋に開催されている長い歴史を有するイベントです。第38回は、総合研究大学院大学の後援を受けて開催しました。第37回からは、若手の研究者や外国人研究者がより参加しやすくするために、研究発表・ショートセッション発表およびポスターセッション発表の三つのセッションにおいては、テーマを設定しないようになり、また、ポスターセッション発表においては、英語による発表も可能にしました。国内外から147名の参加者が集まりました。その中には海外及び国内に在住の15ヶ国の外国人研究者計38人が含まれています。発表者は集会のテーマをめぐってさまざまな角度から研究成果を発表し、質疑応答も活発に行われ、出席者に多くの刺激を与えました。

第38回国際日本文学研究集会における研究発表の全文及びショートセッション発表の要旨、ポスターセッションのテーマを収録した会議録は来年3月に国文学研究資料館より出版される予定で、会議プログラム及び要旨集(日本語・英語)のPDF版は、国文学研究資料館のwebにて公開されておりますので、御覧いただければ幸いです。

(http://www.nijl.ac.jp/pages/event/symposium/2014/japanese_literature.html)

なお、第39回国際日本文学研究集会は平成27年11月14日(土)～15日(日)に開催される予定です。今年と同様、研究発表・ショートセッション発表およびポスターセッション発表の三つのセッションにおいてはテーマを設定しないで、ポスターセッション発表は英語でも可能です。15日午後開催予定のシンポジウムのテーマは「越境する日本文学(仮題)」です。多数のご参加をお待ちしております。平成27年4月下旬から研究発表を募集しますので、詳しいことは来年4月に当館のホームページを御覧いただくよう、お願い申し上げます。(陳 捷)



研究発表



ショートセッション



ポスターセッション



シンポジウム

The 14th International Conference of EAJS (European Association for Japanese Studies) in Ljubljana, Slovenia, 2014

2014年8月27日(水)から30日(土)にかけて、リュブリャーナ大学(スロベニア共和国)においてEAJS(European Association for Japanese Studies, ヨーロッパ日本研究協会)の主催する国際会議が開催されました。この会議は3年に1回、欧州の大学を開場に開催される日本学に関する欧州最大の国際会議で、今回はInterdisciplinary, Urban, Regional and Environmental Studies, Language and Linguistics, Modern Literature, Pre-modern Literature, Visual Arts, Performing Arts, Anthropology and Sociology, Media Studies, Economics, Business and Political Economy, History, Religion, Intellectual History and Philosophy, Politics and International Relations, Japanese Language Teachingといった日本をめぐる15の主題別セッションが立てられ、多くの研究成果が報告され討議が行われました。

初日の27日(水)には、ウェルカムリマークスの後、柄谷行人氏によるNeo-liberalism as a Historical Stageと題されたキーノートレクチャーで会議がはじまり、夕刻には福原隆造氏による舞踏:The Touch of Lifeが披露され、夜にはウェルカムレセプションがありました。翌28日(木)から30日(土)までは9時から17時半まで連日4つのセッションが企画され、上記主題ごとに最大11セッションが組織されました(会議のプログラムと要旨はEAJSのウェブサイト(<http://www.eajs.eu/>)で読むことができます)。会議も3日目を迎えた29日(金)の夜にはリュブリャーナの伝統のあるホテルでのガラディナーも企画され、旧交を温め、また新たな出会いに話しを弾ませる場が提供されました。また、会議開催に先だって25日(月)、26日(火)にはプレカンファレンスイベントとして、また会議終了後の31日(日)にはポストカンファレンスイベントとして、神戸大学主催のWorkshop on Japanese "character" in communication and grammar、筑波大学・リュブリャーナ大学主催のUniversity of Ljubljana & University of Tsukuba Joint Research Forumのほか4回のJapanese database workshopや各種の特別招待講演などの多彩なイベントが開催されました。

縁あって稿者は同協会主催の会議には2003年の第10回国際会議(於:ワルシャワ大学)から参加していますが、稿者の知る範囲内においても年を追うごとに会議の規模は大きくなり、日本人の参加者も増えているようです。国内に留まらない欧州や米国、またアジア諸国、豪州等々への研究連携の広がりや、研究テーマとその成果のあり方が多様化し重層化してゆく現在の研究環境のドラマティックな変化の賜物でもあります。その方向性や研究対象個々の特質等々にまで細やかな目配りのきいた包括的かつ有効的な共同研究を遂行し成果をあげるのとはなかなか難しく、少なくとも稿者の分野である日本古典文学研究の範囲においては多様な企画が試みられながらも、依然としてその模索を続けているようにも思われます(自戒も込めての言葉ですが)。勿論、Inter National Conference of EAJSのような大規模な国際会議は、そのような抽象的議論そのものをも話し合う場であるのでしょうから、個別の研究成果の報告の充実とともに今後は参加者にも一層の企画力や構想力が求められるようになってゆくと思われまふ。次回の会議は3年後、2017年夏にポルトガルのリスボンでの開催が予告されていますが、その時までには研究を開くということを理念的にも方法的にも改めて真摯に考えてみる必要もありそうです。

(海野 圭介)



リュブリャーナ大学
<http://www.uni-lj.si/eng/>



リュブリャーナの街並み

平成 26 年度国文学研究資料館「古典の日」講演会

11月1日(土)に東京都千代田区内幸町の「イイノホール」において国文学研究資料館「古典の日」講演会が行われました。「古典の日」は、古典が我が国の文化において重要な位置を占め、優れた価値を有していることに鑑み、国民が広く古典に親しむことを目的として、平成24年3月に法制化されました。11月1日は、我が国の代表的な古典作品である『源氏物語』の成立に関して、最も古い日時が寛弘五(1008)年11月1日であることからこの日に定められました。日本古典文学の文献資料収集と研究を主事業とする国文学研究資料館も、この「古典の日」の趣旨に賛同し、法制化された一昨年度から記念の講演会を催しており、今回で三回目になります。

昨年度の応募者盛況に応じて、今年度も都心の会場で開催致しました。12時の開場間際にあいにくの雨に見舞われましたが、会場は400人近くの聴衆の熱気に包まれました。

寺島恒世国文学研究資料館副館長の挨拶にはじまり、まず、慶應義塾大学准教授の小川剛生先生から「兼好とは誰かー徒然草の新解釈」という題で講演をいただきました。日本文学史上たいへん有名で、誰でも知っていると思われていた『徒然草』の作者兼好の経歴が後世にねつ造されていたというショッキングな出来事を、多くの史料を駆使しながら明快に解き明かして、会場をどよめかしました。次いで、昨年続き登壇いただいた林望先生(リンボウ先生)が、「紫上をめぐる」という題でお話しをされました。『源氏物語』の女主人公紫の上の存在が物語の中でいかに重要であるかについて懇切に解説されました。ことに、紫の上が他界し、源氏が追憶にふける「幻の巻」を取り上げた終盤は、源氏の悲嘆がまざまざと感じられ、胸に迫るものがありました。折々に読み上げられる御著書『謹訳 源氏物語』の口語訳は、物語の雰囲気を見事に再現しており、会場全体が物語の世界に浸りきっていました。先鋭な学究と深奥な鑑賞、いずれも古典のおもしろさを知らせてくれたお話の余韻を胸に、「古典の日」は終了しました。(田中 大士)



小川 剛生氏



林 望氏



会場の様子

特別展示「中原中也と日本の詩」

「ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん」や「汚れつちまつた悲しみに」といった一節がよく知られる中原中也（1907～1937）。没後80年近くたった今なお、彼の詩は現代人の心に新鮮な響きを放っています。国文学研究資料館では、そんな中也の魅力の秘密に迫るべく、開館20周年を迎えた中原中也記念館（山口市）と協同で2014年10月9日～11月5日に特別展示「中原中也と日本の詩」を開催しました。

本展示では、日本近代文学館、草野心平記念文学館、林風舎、人首文庫等のご協力を得、合計126点に及ぶ資料を展示しました。中也直筆の原稿や親交のあった詩人との書簡も展示し、ご覧になった方々のアンケートでは「同じ時代の詩人などの交流も知ることができて興味深かった。」等と大変ご好評をいただき、展示期間中の来館者数は1,241名にもなりました。また、開催初日には、中原中也記念館館長 中原豊氏、同館学芸員 池田誠氏、中也が多大な影響を受けた宮沢賢治の資料を多く所蔵する林風舎 代表取締役 宮澤和樹氏によるギャラリートークが行われ、大勢の来館者で会場はいっぱいとなりました。トークは盛りだくさんの内容で、参加者たちは熱心に耳を傾けていました。



展示室の様子



ギャラリートークの様子

連続講座「くずし字で読む『源氏物語』」

昨年に引き続き、今西館長による、『源氏物語』でくずし字を学ぶ講座が開催されました。今年も定員をはるかに上回るご応募をいただき、90名の方にご受講いただきました。

講座は、万葉がな、草の仮名の解説、よく使われるくずし字の読み方の手ほどきから入りました。そして毎回、当館所蔵の江戸前期刊絵入本を用いて「もみぢの賀」の巻まで各巻冒頭あたりを読み進めました。現代語訳と解釈が施され、ときには、踏み込んだ語句の説明がなされました。会場からは多くの質問が出され、館長の当意即妙な答えに笑い声上がるなど、終始和やかな雰囲気でした。

江戸期の絵師の想像と多少異なる、物語当時の文化背景についてふんだんに解説がなされた点も特徴の一つであったと言えます。受講者の知的好奇心に大いに応える講座になったことと思います。(野網摩利子)

開催期間：平成26年10月1日、8日、15日、22日、29日

講師：今西祐一郎館長

テキスト：『源氏物語』承応三（1654）年、八尾勘兵衛刊。54冊。絵入本。請求記号、サ4-26。なお、この資料は全冊カラーデジタル画像を当館ホームページ 電子資料館 (<http://base1.nijl.ac.jp/~wakosyo/>) にて公開しており、どなたでもご覧になれます。



今西祐一郎 館長

海を渡った豊後キリシタン史料 ―マレガ・プロジェクトの概要―

2011年、ローマ教皇庁バチカン図書館において、17世紀前半から明治初年に至る豊後地方のキリシタン禁制に関わる、膨大な史料群が発見されました。この史料群をバチカンにもたらしたのは、サレジオ会宣教師のマリオ・マレガ神父です。1929年12月に来日したマレガ神父は、1932年から1950年まで大分教会に赴任し、宣教師として活動する一方で、精力的に豊後地方のキリシタン関係史料を収集・研究し、1942年に『豊後切支丹史料』を、1946年に『続豊後切支丹史料』を刊行しました。この史料集は、現在に至るまで重用されますが、原史料は永く所在不明とされ、その発見が希求されてきました。2011年、バチカン図書館での史料群発見は、まさに待ちに待った朗報でした。しかも、史料集に含まれていない新たな史料や、マレガ神父の手稿・メモなども含む、1万点にも及ぶ史料群でした。

バチカン図書館から日本へ調査協力の依頼もあり、その体制や調査方法について協議がなされ、2013年9月に準備調査を実施し、同年11月にはバチカン図書館と人間文化研究機構とが、調査協力についての協定を締結しました。これに基づき機構は日本関連在外資料調査研究事業のなかに位置付け、「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書の保存・公開に関する調査・研究」班（代表大友一雄）を発足させました。また、バチカン図書館職員と日本側関係機関、そして内外の研究者による「マレガ・プロジェクト」が正式に活動を開始しました。日本側機関には、人間文化研究機構国文学研究資料館、同国立歴史民俗博物館、東京大学史料編纂所、大分県立先哲史料館が参加し、国文学研究資料館が代表機関を務めます。

プロジェクトは(1)文書群の概要調査の実施、(2)バチカン図書館での保存管理と公開体制整備への協力、(3)文書全点の目録作成、(4)全点撮影を通じた画像データベースのウェブ公開、(5)マレガ神父、文書群について基礎研究を進め、切支丹研究・日欧交渉研究をはじめとする諸研究の学術情報基盤の整備を目的とします。すでに、2013年9月、2014年9月に概要調査を実施し、文書への史料番号付与、物理的状态確認、調書作成などの作業が進んでいます。

また、2014年6月には、国文研青木陸氏と元興寺文化財研究所金山正子氏が文書修復方法をバチカン図書館修復室の皆さん10人余に伝えました。日本史料の補修は初体験ということでしたが、2014年に撮影を予定した1500点の確認・補修は修復室のメンバーが担当しました。作業は、概要調査の調査データをもとになされ、処理情報は調査データに追記されました。日本とバチカンとの連携プレーによってモノのそのものの管理と、管理・公開のための情報が整備されつつあります。作業プロセスは、双方の知識や技術の交流の場となり、双方の史料管理システムを理解する絶好の機会となっています。

研究では、2014年11月1日に、バチカン図書館チェーザレ・パシーニ館長、デリオ・ヴァニア・プロヴェールビオ東洋部門責任者を招聘し、『豊後切支丹史料(正・続)』の主たる舞台である臼杵市でシンポジウム「バチカン図書館所蔵マレガ神父収集豊後キリシタン文書群の魅力」を開催しました。マレガ・コレクションがバチカンへもたらされた経緯などの報告があり、多くの市民や研究者と、プロジェクトの成果を共有する場となりました。来年度はバチカン図書館でのシンポジウム開催を予定しています。

本調査研究は、写真全点の撮影、Webでの公開なども含め2019年度まで実施される計画です。

バチカン図書館での概要調査の場で調査参加者を驚かせたのは、『豊後切支丹史料集(正・続)』に収録されていない多くの史料の発見と、その質です。例えば、豊後・臼杵藩による、寛永12年(1635)の家ごとの「きりしたん宗門御改ニ付起請文前書之事」(棄教証文)は、禁制が地域の隅々にまでおよぶ始まりとして位置づけられてきましたが、『豊後切支丹史料』はこの棄教証文を1点のみ掲載し、解説で村々の動向を統計的に処理してキリシタン禁制史の事例として紹介するに止まりました。今回の調査では、この棄教証文が大量に発見されました。しかもそれは(おそらく村ごとに)証文が貼り継がれる形状をとり、なかには全長が24メートルにも及ぶものもありました。棄教証文の情報は、藩庁によって整理され、「きりしたん宗門御改之御帳」が作成されたことが知られていますが、その原簿である棄教証文が、貼り継がれて卷子状に仕立てられ、江戸時代を通じて管理されたこととなります。これらは史料集では確認できなかった原本のみが伝える情報です。

この史料群は、これまで断片的にしか知り得なかった当時のキリシタン禁制の実態を、家・個人レベルで克明に伝える記録であると同時に、臼杵藩のキリシタン禁制に関わる宗門方の記録管理の実態を伝えます。実物のみが有する情報価値といえるでしょう。保存状態の情報化なども含め細心の注意をもって調査を進めることが必要となっています。

(大友 一雄)

シンポジウム「多摩地域の博物館・資料館・美術館における防災と地域連携」によせて

平成26年10月30日（木）、国文学研究資料館大会議室において、シンポジウム「多摩地域の博物館・資料館・美術館における防災と地域連携」が開催されました。このシンポジウムは、東京都三多摩公立博物館協議会と国文学研究資料館のアーカイブズ研究に関わる3つの研究グループが共同で開催したものです。

多摩地域には、近年注目されている“立川断層帯”をはじめ、数々の災害リスクが存在します。地域のかげがえのない歴史遺産を収蔵するとともに、民間に所在するアーカイブズの情報収集・調査・保存の拠点でもある博物館・資料館・美術館にとって、来たるべき災害に向けてどのような備えをすべきか、災害発生時にいかなる対応をすべきかといった問題の解決は、喫緊の課題ともいえるものです。東日本大震災の甚大な被害を目の当たりにし、首都直下地震発生の可能性が強く指摘される現在、こうした課題を克服するための方法のひとつとして注目されているのが、博物館などの収蔵機関をはじめ、国・自治体・民間団体などを結ぶネットワークの構築です。本シンポジウムでは、多摩地域における上記機関の連携のあり方を探り、改めて防災に関する認識を深める機会とするために企画されました。

当日は、①鈴木毅彦氏（首都大学東京）の「多摩地域の地震と地盤災害—立川断層帯と首都直下地震の最新情報—」、②西村慎太郎氏（国文学研究資料館）の「民間所在資料の保全、過去・現在・未来」、③安齋順子氏（くにたち郷土文化館）と高橋健樹（武蔵村山市立歴史民俗資料館）による「多摩の学芸員が関わっている文化財レスキュー—栄村における地域史料保全有志の会の事例から—」、④新田建史氏（静岡県博物館協会）の「静岡県博物館協会の防災への取組」という4つの講演が行われ、その内容をもとに、青木睦氏（国文学研究資料館）の司会によるパネルディスカッションが行われました。

①鈴木講演では、多摩地域における地盤災害のリスクについて、豊富なデータをもとにした解説があり、②西村講演では、災害発生時はもとより資料所蔵者の代替わりや転居など、日常的な散逸の危機から民間アーカイブズを守る必要性が強調されました。③安齋・高橋講演では、東北地方太平洋沖地震の直後に発生した長野県北部地震で被災した栄村の民具や考古資料を、地元住民の方々と一緒になって保全する取り組みが紹介され、④新田講演では、防災チェックシートの活用や地域の人々に身近な文化財の所在を再確認してもらう「文化財ウォーク」の開催など、東海地震の発生に備えた静岡県博物館協議会による10年間の活動を報告していただきました。パネルディスカッションでは、シンポジウムに先立って実施した事前アンケートの結果報告があり、フロアからは、神奈川県における防災への取り組みの事例や、国立文化財機構による文化財防災ネットワーク推進本部設立の情報などが寄せられました。

東日本大震災から3年が経ち、防災への意識が次第に薄れつつある昨今、このシンポジウムは、改めて日常的な地域連携の必要性、特に国—都道府県—市区町村といったタテ軸と自治体・民間団体などのヨコ軸の緊密な連携のあり方や、単に「ネット」だけでなく「ワーク」につなげていく日々の努力の必要性を再認識する機会となったのではないかと思います。

（太田 尚宏）



古典籍共同研究事業センターについて

今年度4月から大規模学術フロンティア促進事業のひとつ、「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」が、当館を実施主体としてスタートしたことは、国文研ニュースNo.36での館長のメッセージに記されています。今回は、計画を推進するために4月に当館内に設置した、古典籍共同研究事業センター（以下、古典籍センター）についてご紹介いたします。

当館B棟5階東側に古典籍センターがあります。古典籍センターは、センター長（館長の兼任）と副センター長のもと、研究組織と事務組織の2つから構成されています。現在スタッフは総勢29名（兼任含む）。30万点にも及ぶ歴史的典籍をweb上で公開してゆくためには様々な作業や会議、手続きが必要となります。たとえば画像情報の公開計画の立案や、所蔵先へ赴いての原本調査・画像収集業務はもちろんのこと、協力機関などから集められた画像情報を検収（点検）し、それらと当館で長年培ってきた「日本古典籍総合目録」の書誌情報とを誤ることなくリンク付けすることも、古典籍センターの役割です。時には新たに書誌情報を作成することも伴いますので、こうした大規模な事業においては、慎重を期してもしすぎることはありません。この事業では、利用者の至便性を第一に考えた新システムによる画像公開を考えており、現在、システムの仕様が確定しつつある段階です。新システムは平成29年度当初までに本始動の予定です。どうぞご期待ください。



センター看板上掲式光景

歴史的典籍は何も国文学分野だけに限るわけではありません。既に当館HPより何点か公開もはじまっていますが、試みに「電子資料館」内の「所蔵和古書・マイクロ/デジタル目録データベース」へ進んでいただき、「書名一覧（他機関蔵）」をクリックしてみてください。「マイクロデジタル一覧」左下に「デジタル公開所蔵者一覧表」を見ることができます。たとえば本事業で収集を開始した公益財団法人研医会図書館の医学書なども既に公開をはじめているのです。今後、新システム稼働まではこうした形で発信を続けてまいります。

http://base1.nijl.ac.jp/~wakosyo/syuusyuu_list.html

もう一つ、古典籍センターの果たす重要な役割に委員会運営があります。現在、本計画を推進するために事業実施委員会、日本語歴史的典籍ネットワーク委員会、国際共同研究ネットワーク委員会、拠点連携委員会という4つの委員会が設置されています。日本の古典籍という豊かな知的資源を利活用してゆけるような国際共同研究を推進していく上で、基盤となるネットワークが順調に構築されるよう審議を重ねております。

共同研究面では、次年度から本格的に始動するために、現在国際型の共同研究のための準備研究が2つ始まっています（研究テーマ：古典と古典籍、日本文化の基層）。また公募型の共同研究は、本年度後半から5つスタートしました。こうした情報は当館HPの「歴史的典籍に関する大型プロジェクト」で逐次紹介します。

<http://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/>

加えて30万点の画像をどのように検索していくかという問題を解決するために、当館教員を中心に画像データへのタグ付けが開始されていますし、将来に向けて画像情報の一部をテキスト化する実証試験も始まっています。先にご紹介したHPとともに、古典籍センターのニューズレター「ふみ」もご一読いただけたら幸いです。

（山本 和明）



センター・事業のロゴマーク

2月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28

3月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

4月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

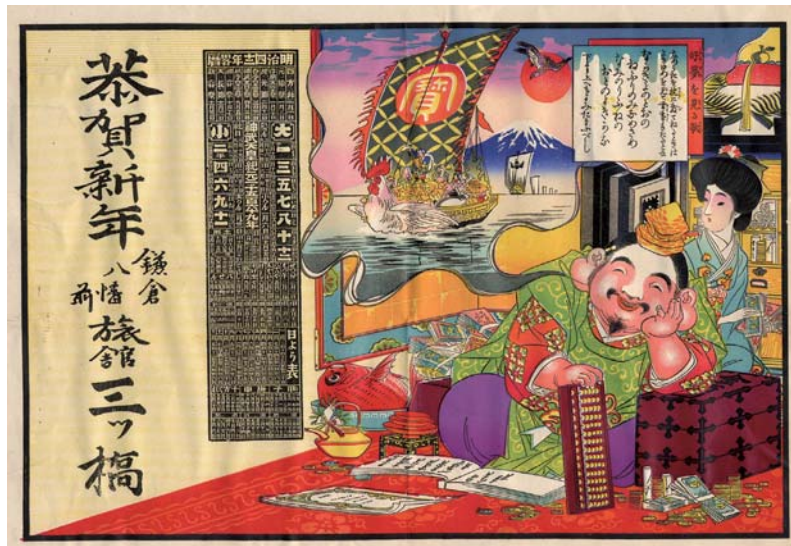
- 開館 :9:30～18:00 ● 請求受付 :9:30～12:00,13:00～17:00 ● 複写受付 :9:30～16:00
- ただし、土曜開館日は、
- 開館 :9:30～17:00 ● 請求受付 :9:30～12:00,13:00～16:00 ● 複写受付 :9:30～15:00

表紙絵資料紹介

鎌倉八幡前旅館「三ツ橋」正月用広告 明治42(1909)年 260×379mm
 (株)オリコミサービス寄託増田太次郎広告コレクション
 整理番号：3574

鎌倉八幡前にあった旅館「三ツ橋」の明治42年正月用の広告である。真ん中上部に、新年の季語でもある宝船が富士山を背景に、さらに明治42年の酉歳に因んで船首に鶏が描かれている。中央の大黒さんは、帳面付けを放棄し、正月の美酒で赤ら顔になり紙幣・銭貨に埋もれて満面の笑みを湛えている。

右上囲みは、「好夢を見る歌」として「なかきよの とおのねふりの みなめさめ なみのりふねの おとのよきかな(永き世の 遠の眠りの みな目覚め 波乗り船の 音のよきかな)」の回文歌と、左囲みには、明治42年の略暦が配置されている。コレクションから正月にふさわしい広告を選択した。本コレクションの主要画像は、「増田太次郎広告コレクションデータベース」で公開中。(山田 哲好)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
 〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
 Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

発行日 平成27年(2015)1月23日
 編集 国文学研究資料館広報出版室
 印刷所 睦美マイクロ株式会社
 ©人間文化研究機構国文学研究資料館